

富田製菓と賀川豊彦鳴門記念館そして ドイツ人俘虜の物語 (その3)

勘川 捷治郎*

4. ドイツ人俘虜とは

サラエボにおける一発の銃声から始まった第一次世界大戦(1914~1918年)は欧州大戦とも呼ばれ、日本からすれば遠くの戦いであった。が、日英同盟のよしみにかこつけて、中国進出を狙った日本は、東洋におけるドイツの根拠地青島^{チンタオ}を攻撃、約4,600名のドイツ兵を俘虜とした。ドイツ軍5千に対して日本軍は3万。しかもドイツ軍のほとんどはアジア各地から招集された民間の義勇兵。勝って当然の戦いである。これを火事場泥棒という人がいる。

当初、俘虜たちは全国12カ所の寺院などに收容されていたが、のち6カ所に統合された。その1カ所が板東俘虜收容所で、約1,000名が收容された。その場所は、賀川豊彦が少年時代に親しんだ大麻比古神社や霊山寺、極楽寺に囲まれた霊的雰囲気のある板東の森であった。收容所の開設は1917年4月で、閉鎖は1920年2月。その3年足らずの短い期間に、ドイツ人俘虜たちは所長松江豊寿^{とよひさ}大佐の下、收容所内外でかなり自由に活動し、地域住民との文化交流に花を咲かせたのである。

4.1. 俘虜たちの生活

約1,000名の俘虜のうち軍人はわずか99名で他はさまざまな職業をもつ招集兵であった。法律家、教師、宣教師、建築家、音楽家、印刷技術者、農夫、仕立屋、理髪士、料理人等々、なかには東京帝国大学の外国人教師で、俘虜解放後はふたたび元の教師に戻ったという人もある。

そのような訳で俘虜たちは所内で、肉屋、パン

屋、菓子屋、洋食店、理髪店、印刷所、写真屋等々、なんでも開き、80軒もの店小屋が立ち並んだ。ピアホールやボーリング場、風呂屋もあった。生活に必要なものは全て揃っていたといっても過言ではない。そして所外ではそれらの技術指導や製作品の展示会も行った。富田製菓畜産部における酪農技術の指導もその一つである。したがって、地域住民も俘虜というより教養ある文化人として接し、尊敬の念をこめて知識・技術の吸収に努めた。ドイツ菓子の作り方を学んだ住民の子孫は今もドイツ軒というパン・菓子店を営んでいる。一方、俘虜たちも地域の文化を吸収している。たとえば大谷焼でビールのジョッキを作ったり、入浜式製塩法をイラスト入りで克明に記録したり、というふうに。

俘虜たちの生活で特に注目されることの一つは、收容所が開設されるやただちに医療互助組合「板東健康保険組合」を結成したことである。組合は所内に二つの薬局を経営した。このこともあって、1918年に猛威をふるったスペイン風邪による死者は、板東では他の收容所に比べて少なかった。わが国に健康保険法が実施(1927年)されるより10年も前のことである。組合のスローガンは「一人はみんなのために。みんなは一人のために」であった。相互扶助の精神をよく表しており、賀川が好んで書いた「一人は万人のために、万人は一人のために」という言葉はこれである。收容所内には明らかに、ドイツ社会が形成されていた。その社会がそれを取り巻く地域社会と対等の関係で、否、むしろそれ以上の関係で交流したのである。

こうした生活の様子が、所内新聞の“Die Baracke”(ディ・バラック)にユーモラスなスケツ

* Shojiro KANGAWA

摂南大学図書館

〒572-8508 寝屋川市池田中町17-8

チを添えて記録されている。

4.2. Universität-Bando

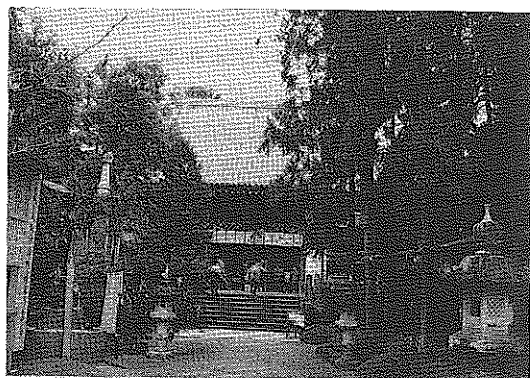
そのスケッチの一つに“Universität-Bando”（バンドー大学）と添え書きのついたものがある。俘虜たちが所内を散歩している風景を描いたものである。カントの散歩は有名であるが、ドイツ人たちはとにかくよく散歩をしたようである。板東では他の収容所よりも所外散歩の機会が多く、日帰り遠足なども頻繁に行われ、途中、海岸で水泳や船遊びまでしている。

俘虜であったヘルマン・ハーケ氏の子息は父から聞いた話として、「収容所の中ではいろんな学校を設けて、お互いに科学、学問を学ぶことができた。日本語やその他の言語また文学が教えられた。手工業や物理学の授業もあった。多くの捕虜がここで教育を身につけ、また芸術活動に参加する可能性をもった」と語っている。まさしく「バンドー大学」である。このように俘虜たちは所内外でお互いに教育し、学習し、音楽・演劇活動、映画会、写真展、絵画展など、ありとあらゆる学習活動、文化活動を行っている。

もちろん「大学」であるから、何をおいても図書館活動がある。東アジアのドイツ人クラブなどから送られてきた図書5,420冊が当初の蔵書であり、利用状況は1日平均約170冊の貸出しであった。これは利用者1人当たりの貸出し冊数にすると、年間約60冊になり、現在日本の大学の最高が50冊程度であるから、状況が違うとはいえ、非常に高い利用率と言えよう。

また、さすがに音楽の国ドイツ、音楽活動が顕著である。5つの楽団と2つの合唱団が組織され、数十回の演奏会を開き、音楽教室も開き地域住民の指導も行っている。そして、1918年6月1日に靈山寺でベートーベンの『第九』が演奏され、シラーの友愛をテーマとした『歓喜の歌』が板東の森に響きわたったのである。これが日本における『第九』のルーツとされ、今では誰もが知るところとなっている。

そして、80年後の1998年1月28日には、小澤征爾が長野冬季五輪開会式での『第九』を演奏するのに先立ち、五輪と同じ独唱者を引き連れて本邦初演の地、鳴門で指揮をとっている。



【第九】本邦初演の地、靈山寺

出版活動では、「収容所のベストセラー」と呼ばれたものに“Drei Märchen”（3つの童話）がある。これは神戸のドイツ人貿易商から差し入れされた本人自作の童話を出版したものであるが、板東には1,000名程度しかいないのに1,550部も売れた。それは板東以外の収容所からの注文があったためである。

演劇活動では、私の好きな『アルト・ハイデルベルク』なども上演されている。

建築活動では、前述の富田畜産部牧舎のほか、眼鏡橋、ドイツ橋、そして現存していないが旧国鉄撫養駅や旧撫養町役場（鳳鳴閣）などがある。この鳳鳴閣は久三郎訪独の際の歓送会や帰朝披露宴に使われている。また私の子供の頃は、この鳳鳴閣の前で阿波踊りをよく踊ったものである。が、ドイツ人設計の建物であったとは知らなかった。知らないことばかりであるが、『第九』の初演と同じ年の6月に、吉野川の支流である撫養川に架かる文明橋の落成があり、これの渡り初めを久三郎が行っている。この橋の建設にドイツ人が関わったという記録はないが、彼らは外出時にはこの橋を渡っただろうし、賀川も伝導の折にはこの橋を渡ったはずである。そして私の通っていた小学校の児童たちは、俘虜たちの展覧会を見るためにこの橋を渡って往復20キロの道程を歩いたのである。現在の文明橋は1938年（昭和13年）に架け替えられたものであるが、この橋も「文明橋」の名にふさわしく時代を感じさせるものである。橋からの眺めは川面が広々としていて素晴らしい。賀川が吉野川の自然に心癒されたという気

持ちが理解される。

そして建築物の圧巻はヴェルサイユ条約調印(1919年)以後、俘虜たちにも個人生活が認められるようになり、収容所の裏山に200戸もの手作り別荘が立ち並んだことである。その壮観は“ヴェルサイユ山荘”とでも呼ぶにふさわしいものである。

気候、風土がライン地方に似ているという鳴門において、俘虜たちの活動はあまりにも多彩で、ここにはその一端しか紹介できないが、そういう自由な活動ができたのは収容所長・松江豊寿の人柄に負うところが大きい。では松江とはどのような人物であったのか。それを知るには松江の父母たちの時代に遡る必要がある。

4.3. 戊辰戦争と松江の父母たち

松江家はもともとは仙台藩の重臣で、あるとき正妻と妾が仙台と会津に一家をなした。それが会津の松江家の始まりであり、鶴ヶ城の郭外にある名勝御葉園に住んでいた。そのことから、松江家は菓草栽培に関係していたかもしれないと言われている。

戊辰戦争で会津が官軍に敗れたのは1868年9月である。このときの会津の兵は5千、官軍は3万で、ちょうど青島におけるドイツ軍と日本軍の兵力の差に似ている。

官軍として戦った遠州人久三郎が会津まで出征しなかったのは幸いであった。が、石松ならぬ清水次郎長一家28人衆の一人柴田小文治は庄内藩で農兵として官軍と戦い、敵を撃退するなど奮闘している。小文治は帰郷して最上川の船頭や川人足を統括する親分になっていたのである。庄内藩は奥羽越列藩同盟の一員として会津藩とともに最後まで戦った。

豊寿の父久平は戊辰戦史上最悪といわれる戦いを朱雀士中隊参謀として城外でゲリラ戦を戦った。朱雀隊というのは18歳から35歳までの隊で、有名な白虎隊は16、17歳、青竜隊は36歳から49歳、玄武隊は50歳以上、いわゆる古代中国の守り神の四神(キトラ古墳などの壁画にある東西南北の神)を隊名としていた。

このとき久平は城外戦でどのような光景を見たか。ゲリラ戦の総督佐川官兵衛はその光景をこう

語っている。「西軍のなす所を見よ。民の財貨を奪い、無辜の民を殺し、婦女を姦し、残暴極まり。これ姦賊にして王師にあらず」と。つまり官軍ではなく姦軍だと言っているのである。そのとき城下には薩長軍主体の官軍のなかに会津藩降伏の窓口となった土佐の板垣退助(1837~1919)がいた。板垣はそこで敵の農民がイモを差し入れにきたのを見て「藩主と民衆が離れてはいけない」ことを悟った。これが後の自由民権運動の始まりであるという。とすれば、「自由は土佐の山間より」といわれているが「自由は会津の民間より」という言い方もできよう。とまれこの運動は全国的に広がり、既述したように賀川の父純一も徳島における自由民権運動の創始者の一人となったのである。

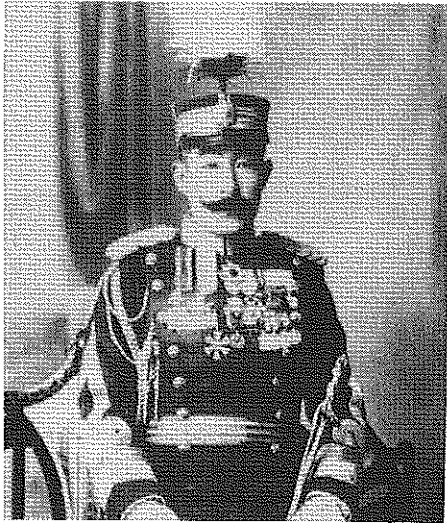
一方、母のふは鶴ヶ城で籠城戦を戦った。城内で共に戦った者に、山本八重がいた。八重は砲術指南役の娘として、七連発のスペンサー銃を手に大砲隊を指揮して戦った。

ちなみに後に八重の夫となる新島襄(1843~1890)は1887年に同志社病院、京都看病婦学校を開き、八重は1891年に日本赤十字社に加盟、日清日露の戦争中は篤志看護婦として傷病兵の看護に従事している。

敗戦後、久平は1万5千の元藩士とともに斗南に移住し、苦難の開拓生活を送ることになる。そのときの体験を、後に陸軍大将になった会津人柴五郎はこう書き残している。「落城後、俘虜となり、下北半島の火山灰地に移封されてのちは、着のみ着のまま、日々の糧にも窮し、伏するに憚なく、耕すに鋤なく、まことに乞食にも劣る有様にて、草の根を噛み、氷点下二十度の寒風に蓆を張りて生きながらえし辛酸の年月(後略)」と。

4.4. 会津人・松江豊寿

このような敗者の悲哀を痛感し、苦渋の生活を送った父母たちの痛みは、松江自身の痛みでもあっただろう。会津藩士松江久平の長男として会津若松市に生まれた松江豊寿(1872~1955)はそのような境遇や、持って生まれた性格のせいもあって、「上に厳しく、下にやさしく」というのが松江の基本的姿勢であった。外見はドイツ趣味のカイゼル髭をはやし、敵めしげであるが、その目も



板東俘虜収容所所長，松江豊寿
 (「板東俘虜収容所」研究(昭和62・63年度
 文部省特定研究報告書)より転載)

とはいかにも涼しげである。

松江は16歳で陸軍幼年学校に入り、士官学校に進み、日清・日露戦争を経験し、1904年韓国駐劄軍副官となる。ここで松江は韓国統監府初代統監となった長州人伊藤博文から可愛がられ、よく食事を一緒にし、そのために口がおごって夫人を困らせたという。しかし会津人松江にとって韓国での仕事は地獄であった。戊辰戦争で会津が受けた仕打ちを韓国に対して行うことになったのである。日韓条約調印、韓国軍隊解散強行の混乱の中、1907年10月松江は突如副官を解任され、浜松第67連隊に転任を命ぜられる。

浜松は富田久三郎の郷里である。しかし久三郎はこのときすでに鳴門に移住しており、松江との出会いはなかった。それから10年後の1917年に松江が板東俘虜収容所長として鳴門に赴き、富田畜産部牧舎をドイツ人俘虜の協力で建築したことで、松江と久三郎はここで初めて出会いを持ったと思われる。

松江は、家庭にあつては決して子供たちを叱ることはなく、よほどのことのない限りいつも家族とともにゆっくりと時間をかけて食事をした。そして俘虜たちについては「彼らもお国のために戦ったのだから」というのが口癖であった。その心根は「武士道」にあつたのではないかと推察され

ている。刀折れ、矢尽きて軍門に下ったものを「もののふ」として遇する、それが武士としての誇りである。とりわけ会津人、斗南人としての松江にはその思いが強かっただろう。しかし松江一人の力で俘虜を人間的に扱えたわけではない。その拠り所として、俘虜を人道的に扱うことを目指したジュネーブ条約(1864年)があつた。日本は非文明国と見られ、1886年になってやっと加盟が認められた。だから、文明国であることを証明するために、俘虜を人道的に扱うという政策的な意図もあつた。

また、別名「赤十字条約」と呼ばれ、キリスト教的と考えられたジュネーブ条約がたやすく国民に浸透した理由として、新渡戸稲造(1862～1933)は「武士道」の精神をあげて説明している。「Bushido, The Soul of Japan」の著者新渡戸は松江同様、戊辰戦争に敗れた盛岡南部藩士の出で、内村鑑三(1861～1930)らとともに札幌農学校に学んだキリスト者である。新渡戸は賀川らと共に既述の東京医療利用組合を設立したり、長井長義博士同様、女子教育にも尽力し、東京女子大学の初代学長を務めるということもしている。

一方、武士道精神とは別に、松江は「私には五人の異常者より百人の酔っ払いのほうがましに思える」といった考え方で収容所を管理している。これは精神科医の立派な処方と言えないだろうか。

松江は収容所が閉鎖された後、間もなく少将に任官し陸軍を退役した。そして会津若松市の市長に迎えられ、同じく会津人で東大総長を2度務めた山川健次郎らとともに白虎隊の碑の建立に尽力した。

後年、松江は板東時代を回想して「板東は私にとって最もなつかしい土地である。あそこで私は自分の理想を追うことができたのだ。ドイツ人だけでなく、私にとっても板東は第二の故郷なのである」と語っている。

4.5. マツエ賛歌

「(松江が)我々に示した寛容と、博愛と、仁滋の精神をわれわれすべての者は決して忘れないであろう。「Alle Menschen sind Brüder」(四海みな兄弟)という言葉は彼のためにある」と俘虜の一

人クルト・マイスナーは語り、他の一人ポール・クーリーは「バンドーにこそは、国境を越えた人間同士の真の友愛の灯がともっていたのでした。私は確信をもっていえます。世界のどこにバンドーのようなラーゲルが存在したでしょうか。世界のどこにマツエ大佐のようなラーゲル・コマンドーがいたでしょうか」と言っている。

研究者たちもまた次のように述べている。「このようなヒューマニティーにとんだ俘虜収容所がこれまで、世界のどこかに存在したであろうか」(尾野比佐夫他)、また「ある時期に敵国の俘虜がいたというのでそれを記念する会館、建物が建っている。おそらくこういう現象は世界でも一つではないかと思えます」(富田弘)と。

俘虜たちも研究者たちも、この「板東俘虜収容所」を奇跡的存在と見ている。これはちょうど大宅壮一や徳富蘆花が賀川の存在を奇跡と呼んだのと似ている。それではこの奇跡は何によって生まれたのか。「ジュネーブ条約」の時代性、「板東」という土地柄など、様々な条件が重なり合っているだろう。が、しかし収容所長・松江豊寿の存在を抜きにして考えることはできない。松江もまた「地の塩」と呼ばれるにふさわしい人物であったと言えよう。

4.6. 俘虜たちの帰国後

ドイツに帰国した俘虜たちは、板東時代を懐かしんで、フランクフルトやハンブルグでバンドー会を結成した。そしてある俘虜はバンドーを再訪し、ある俘虜は鳴門市に手紙を書いた。俘虜であった父親の話聞いて子供たちまでがバンドーを訪問した。

俘虜たちにとってバンドーは「大学」であり「アルト・ハイデルベルク」であったのだ。

こうして、俘虜収容所が縁で鳴門市はドイツとの友好を深め、1972年には俘虜と住民との友情を記念するためにドイツ館が建設された。1973年には、ある俘虜の出身地でもあったリュネブルク市と姉妹都市となった。同市は13世紀半ばにはヨーロッパを誇った「塩の町」であり、そこで産出した岩塩はハンザ同盟の都市・リュベックから積み出されていた。リュベックは、主人公が第一次世界大戦の戦塵に突入していくとこ



姉妹都市リュネブルクの市庁舎をモデルにした
鳴門市ドイツ館

ろで終えている小説『魔の山』の作家、トーマス・マン(1875~1955)の生まれた町である。この町出身の俘虜も3名いた。

俘虜収容所は賀川にも影響を与えた。1920年、賀川は収容所の閉鎖後に板東を訪れ、富田畜産部牧舎の管理人だった親友の船本宇太郎から俘虜たちが収容所内で実践していた酪農やハム製造の方法等を教わった。また、俘虜たちの相互扶助組織としての健康保険組合の大切さを学び、ドイツの社会福祉事業に関心をもった。賀川は1924年にリュネブルク等の修道院を中心とした貧困者救済住宅や養老院等の慈善事業を見学し、元ドイツ人俘虜とも会っている。これらはその後の賀川のセツルメント活動や社会事業に大きく生かされる場所となった。

久三郎もまた訪独のおり、富田畜産部で酪農の指導をしてもらったクラウスニツァーを訪ねて俘虜当時のことを楽しく語りあったという。

5. おわりに

誕生しようとしている賀川豊彦鳴門記念館は実におもしろい。富田久三郎の牧舎を松江豊寿所長のもとのドイツ人俘虜が建て、そこで賀川豊彦が農民福音学校を開いた、というふうに多くの人々の魂が寄り集まった建物がモデルになっているのだ。もともとその地域は四国霊場や阿波国一の宮があり、多くの魂のより集う土地柄でもある。そういうところで遠来の客、ドイツ人俘虜たちが地元住民たちに『第九』を演奏し、『歓喜の歌』を

合唱して聴かせたのである。その歌声は今も板東の森に響いているのではないだろうか。そしてその歌声の中には会津人松江豊寿や遠州人富田久三郎、阿波人賀川豊彦、その父や母たち、あるいは日本古来の神々、釈迦やキリストに至るまで、諸々の魂が寄り集まって渦潮のように轟いているのではないだろうか。

このドイツ人俘虜の物語が美しいものであるとすれば、それはジュネーブ条約のきっかけとなったクリミア戦争や戊辰戦争の死者たち、そのほか計り知れない戦争犠牲者の上に成り立ったものであろう。まさしく「桜の樹の下には死体が埋まっている」のである。

記念館のモデルが元富田製薬畜産部の牧舎でなければ、私は本稿を書くことはなかっただろう。私自身もまた呼び寄せられた魂の一つであるかもしれない。

記述の内容は本誌の性格上、薬学、製薬、医療、教育、図書(館)等をキーワードとしたが、かなり逸脱しがちであった。しかし、薬学、あるいは社会薬学が患者や人類の“Quality of Life”を目指すものであるなら、大きな意味での逸脱はなかったと思う。

最後に、本稿の記述は参考文献としてあげた著作に負うところがはなはだ大きい。またそれらの著作のほかにも展示会におけるパネルの説明文も参考にした。ほとんどそれらの切り貼りと言ってもよい。これも何かの縁と思って、著者ならびに関係各位にはご寛恕願いたい。と同時に関係資料の提供および賀川豊彦関係施設や船本牧舎(元富田製薬畜産部牧舎)の案内をして下さった方々には深く感謝を申し上げます。

参 考 文 献

- 1) 賀川豊彦・人と働き. 東京, 雲柱社, 1993.
- 2) 米沢和一郎: 友愛の里に賀川豊彦鳴門記念館を. 賀川豊彦記念・松沢資料館資料館ニュース, 43, 3, 1997.
- 3) 勘川一三: 賀川豊彦鳴門記念館建設の意義につ

- いて. 賀川豊彦記念・松沢資料館資料館ニュース, 43, 1-2, 1997.
- 4) 賀川豊彦鳴門記念館設立を目指す会会員募集のお願い. 鳴門, 賀川豊彦鳴門記念館設立実行委員会, 1997.
- 5) 賀川豊彦全集刊行会: 賀川豊彦全集(24). 東京, キリスト新聞社, 1963.
- 6) 岩波書店編集部: 近代日本総合年表(第2版). 東京, 岩波書店, 1984.
- 7) 緒方 彰: 生命の水みち溢れて; 賀川豊彦とともに. 大阪, 大阪キリスト教書店, 1994.
- 8) 鳥飼慶陽: 賀川豊彦と現代. 神戸, 兵庫部落問題研究所, 1988.
- 9) 上遠恵子: レイチェル・カーソンその生涯. かもがわブックレット(57). 京都, かもがわ出版, 1993.
- 10) 三好昭一郎他: 徳島県の百年. 東京, 山川出版, 1992.
- 11) 原 豊: 現代塩産業論. 東京, 同友館, 1997.
- 12) 富田製薬百年のあゆみ. 鳴門, 富田製薬, 1992.
- 13) フジサワ 100年史. 大阪, 藤沢薬品工業, 1995.
- 14) 松尾恒雄: 時代の反照; 神戸女子薬科大学校史・大正十三年一昭和三十一年. 東京, 文眞堂, 1992.
- 15) 日本薬学会百年史. 東京, 日本薬学会, 1982.
- 16) 金尾清造: 長井長義傳. 東京, 日本薬学会, 1960.
- 17) 佐藤佳年子: 日本の薬学の恩人達. 薬学図書館, 41(3), 303-304, 1996.
- 18) 二宮一彌: 日本薬局方物語. 薬学図書館, 39(1), 21-27, 1994.
- 19) 内村鑑三: 代表的日本人. 東京, 岩波書店, 1995.
- 20) 木村 勲: 石川啄木と妹・光子. 朝日新聞大阪本社版, 1996-11-7.
- 21) 林 啓介: 「第九」の里ドイツ村; 『板東俘虜収容所』改訂版. 徳島, 井上書房, 1993.
- 22) 林 啓介他: 板東ドイツ人捕虜物語. 東京, 海鳴社, 1982.
- 23) 尾野比佐夫他: 「板東俘虜収容所」研究; 昭和62・63年度文部省特定研究報告書. 鳴門, 鳴門教育大学社会系教育講座・鳴門教育大学芸術系教育講座(音楽), 1990.
- 24) 富田 弘: 板東俘虜収容所; 日独戦争と在日ドイツ俘虜. 東京, 法政大学出版局, 1991.
- 25) 横田 新: 板東俘虜収容所長松江豊寿. シリーズ維新の群像. 会津若松, 歴史春秋出版, 1993.
- 26) 中村彰彦: 二つの山河. 東京, 文藝春秋, 1994.
- 27) 星亮一: 奥羽越列藩同盟. 東京, 中央公論社, 1995.
- 28) 橋詰延寿: 高知市史跡めぐり. 高知, 高知市観光協会, 1968.
- 29) 佐藤全広: 新渡戸稲造の信仰と理想. 東京, 教文館, 1985.
- 30) 新渡戸稲造: 武士道. 東京, 岩波書店, 1997.

(原稿受け: '98. 8. 24)